

平成30年度 堺市総合教育会議 議事録

会 議 名 平成30年度 堺市総合教育会議
開 催 日 平成30年11月26日（月）
場 所 堺市役所本館3階第1会議室
出 席 者 竹山修身市長 中谷省三教育長 内藤早苗教育委員
大島幸恵教育委員 河盛幹雄教育委員 鈴木真由子教育委員

開会 午前11時

<事務局>

定刻になりましたのでただいまから平成30年度、堺市総合教育会議を開催いたします。

皆様におかれましては、公私何かとご多用の中、ご出席を賜り、ありがとうございます。最初に資料の確認をお願いいたします。

まず、次第でございます。続きまして配席図、資料の1枚目、「学力向上について」、それと「大阪教育大学附属平野中学校」という標題のある資料がございます。皆様よろしいでしょうか。

それでは開会にあたりまして、竹山市長からご挨拶を申し上げます。お願いします。

市長あいさつ

<竹山市長>

平成30年度堺市総合教育会議の開催にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。

ご多忙の中、教育長、教育委員の皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。皆様には、平素から、本市の教育行政の発展のためにご尽力をいただき、厚く御礼申し上げます。

私どものまち堺は、本年6月にSDGs未来都市という、国連の推奨する持続可能な開発目標、17のゴールがあるわけですが、それを実践する都市に選ばれました。そしてその中の1つの理念である「誰一人取り残さない」ということは、まさしく私ども堺の教育にふさわしいのではないかと考えております。質の高い教育をすべての堺の子どもたちにしっかりと根付かせるように努力することが私たちの責任であると考えております。

本日は、「学力等の向上について」ということで、「等」の中にはやはり人間力、体力等も含まれております。学力のみならず、バランスのとれた堺っ子をどのようにして育成していくのかということをご議論させていただきたいと思っております。どうかよろしく申し上げます。

簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

<事務局>

ありがとうございました。

それでは本日の議事に入らせていただきます。

本日の会議は公開となっておりますのでよろしくお願いいたします。

会議の進行は堺市総合教育会議運営要綱第 3 条に基づき竹山市長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

案件 学力等の向上について

<竹山市長>

それでは議長として、議事を進行させていただきます。本日の案件は、「学力等の向上について」でございます。まず担当課からの説明をお願いいたします。

<教育政策課長>

教育政策課中山です。資料について説明させていただきます。

お手元の資料「学力向上について」をご覧くださいませでしょうか。

3つの点からご説明申し上げます。1つ目、「総合的な学力」の育成についてです。

堺市教育委員会の学力観である「総合的な学力」において、第 2 期未来をつくる堺教育プランでは、小・中学校とも総合学力プロフィールの学力、特に「知識・理解」、「技能・表現」、「思考・判断」の部分が伸び悩んでいることから、教科の学力の向上を課題の上位に位置付けております。

各学校では年度当初に学校力向上プランを作成しまして、年度末に学校評価を行っております。その間、学力については全国学力テスト等の結果による総合学力プロフィールを分析し、授業改善等に取り組んでおり、継続的な検証改善サイクルの確立に取り組んでおります。

続きまして主な取組をご説明申し上げます。

平成 29 年度より府費負担教職員制度の権限移譲を踏まえた、堺らしい特色のある教育、小中学校で一貫した学習指導や生徒指導の推進、授業改善の推進、安全安心で良好な学校環境の整備、堺マイスタディの実施などに取り組んできたところです。

続きまして、全国学力・学習状況調査の推移をご覧ください。初めに平均正答率の推移を教科ごとに示しております。小学校は府平均を上回っており、算数は昨年度に続きまして、全国平均以上となっております。中学校は府平均と同程度となっておりますが、全国・府平均以下というのが現状です。

続きまして、平成 30 年度の正答数の分布を示している表をご覧ください。正答数が低位・中位・上位の割合を、全国を 100 とした数値で表示しております。小学校につきましては

正答数が7割を超える児童の割合が多く、中学校では正答数が4割以下の生徒の割合が多くなっております。

最後に、学校の授業改善と平均正答率の推移ですが、小学校では、かつて授業改善に関する児童の回答結果が芳しくなかったものの、学校の授業改善が進み全国平均を超え、それに伴い学力テストの結果も全国平均を超えたものと考えております。

中学校につきましては授業改善に関するデータが平成26年度では低位でしたが、平成27年度から大きく伸びております。タブレットの活用も含め、授業改善を全国レベルに押し上げることが学力テストの結果につながるものと考えられます。

以上、学力観、主な取組、全国学力・学習状況調査の結果の状況についてご説明申し上げます。以上です。

<竹山市長>

ありがとうございました。

担当課からの説明が終わりました。

それでは、このたび新しく堺市教育委員として就任されました鈴木委員からまずご意見をいただきたいと思っております。

鈴木委員におかれましては大阪教育大学附属平野中学校の校長として教育現場に携わられた経験も踏まえてのご意見をいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

<鈴木委員>

失礼いたします。平成26年度から平成29年度まで4年間、大阪教育大学附属平野中学校の管理職をしておりましたので、そちらの情報を少し提供させていただければと思っております。配布していただいた資料は、5つの学校園がある平野地区において、平野中学校がどのような特色のあるプログラムを展開しているかということ整理したものになっております。

「地域、大学をはじめとする多様な連携」と掲げておりますが、例えば、外部人材の活用や、卒業生に同窓会を通じて平野中学校の教育活動に参画してもらうなど、地域とどのようにつながりながら子どもたちの学力を定着させていくのか、豊かな学びを実現させていくのかという視点で工夫しているということです。

また、中学校単独での教育ではなく、5校園の連携の中で、例えば小中の接続や中高の協働といったような、校種を越えた縦の長いスパンで捉えた学力ということも日々検証しているところです。

平成29年度の研究主題ということで『仲間とともに「考え」「確かめ」「発動する」力を育む授業づくり』というタイトルがありますが、これが学校の教育目標と連動しております。「考える」「確かめる」「発動する」というのは、これからの学力観の中で重視されている思考力、判断力、表現力とリンクしております。これらにどのように子どもたちを取り

組ませているかということですが、1つ目は、思考力、判断力、表現力のベースになる学習習慣作りです。学習習慣は子どもたちや家庭の環境によってさまざまですが、学校では、毎朝 10 分間、読書の時間を設けること、それから放課後に学習の時間を 10 分間設けることで、習慣化された学習に子どもたちが体を通して慣れていくという取組をしております。朝の 10 分間の読書では、好きな本を持ってきたり、学級文庫に置いてある本だったり、図書室から借りてくるといったように、子どもたちが集中できる環境を整えて読書をし、読書の能力をつけるということをしています。

放課後学習は「アドバンスドスタディ」と呼んでいますが、1 週間ごとに教科を決めて、例えばドリルのような計算問題をするとか、英語の単語をしっかりと学習するとか、普通の活用型の授業の中では取り組みにくい部分をそこに充てたり、小テストを実施したりしています。また、自由設定の場合もあり、教員が計画的に設定します。1 週間を通して、例えば、この週は学年で国語のこの部分をやろう、と提案するような形になっております。学習のスピードは子どもによって異なりますので、早く終わってしまえば宿題をやってもいいし、とにかくその 10 分間集中して静かな学習環境の中で自分の学習に取り組むということを推奨しております。

2つ目に、情報開示に学校全体でしっかり取り組んでおります。

年度初めには学習計画（シラバス）を保護者と生徒たちに提示します。学年の PTA 集会で、学年主任からその学年の教育課題や目標について説明した後、それぞれの教科で、どのような計画で何をポイントにして評価をしていくのかといったような学習計画の説明があります。

今年度はさらに、グLOSSアリー（用語集）をまとめ、シラバスに掲載しています。例えば、保健体育の授業で先生が「コツを掴んで」とか「スペースを上手く使って」と言ったときに、そうした教科特有の表現の中で、先生が何を求めているのかが子どもがわかるように、1つひとつの言葉を挙げて定義を具体的に説明したものです。それを学習計画も含めてホームページや冊子にも掲載し、全ての子どもたちと保護者に説明をするという形をとっております。このように、いつ頃何があるのか、どのような課題をどのように評価されるのかといったようなことを、子ども、保護者、教員、学校が共有するということを大切にしております。

また、年度末には生徒と保護者に向けてさまざまなアンケートを実施しまして、それを学校評議会の中で見直し、ホームページで結果を公開しております。

3つ目に、教員研修です。管理職がいつでも自由に授業参観できるようにしておりますし、必ず月に 1 回研修の時間を設けて、教員相互の授業参観や、授業の研究会・検討会というものを行っており、教科毎にもそれを推奨しております。研究発表大会が来週の土曜日に予定されておりますが、今年度は道徳と総合的な学習の時間がテーマになっております。来年には中学校でも道徳の教科化が決まっておりますので、それに向けて一昨年からかなりの力を入れて教員全員で取り組んでおります。教員がそれぞれに研修を積むということが

当然であるという前提の中で、授業を公開し、その評価を授業改善という形で子どもたちに返すということを徹底することで、学力に結びつくのではないかとということで研修をしております。

以上、平野中学校の取組の情報提供とさせていただきます。

<竹山市長>

ありがとうございました。

学力等の向上についての平野中学校での実践をお話いただきました。

私事ではございますけれど、私の長女が平野中学校出身なのですが、中学校の雰囲気良かったと言っており、中学校に非常に馴染んでいましたね。そして勉強が面白かったと言っていました。先生方が細かくケアしてくれていたのではないかと思います。そういう意味で、今お話を聞きますと、子どもの能力や個性をうまく活かすということを中心にやられているのではないかと思います。個別具体的に子どもの学ぶ意欲をどのように高めていくかということを中心になさっており、感心させられたところでございます。

それと、私は公立小学校・中学校の利点はやはり地域と密着していることだと思っております。地域の子どもが地域の人たちと育つためには地域の小学校・中学校といかにして連携していくかにかかっていると思っておりますけれども、平野中学校では地域との交流はどのようにされているのですか。

<鈴木委員>

平野地区は、幼稚園から小学校、中学校と進学してくる子どもたちも一定の割合でおりますので、わりと公立学校に近い地域とのつながりというものはあるのですが、意図的に力を入れている部分もありまして、地域の方たちとの連携協議会を定期的開催していることや、学校評議員には必ず地域の方に入っているということ、それから、卒業生も保護者も含めてですが、平野地区でいろいろなスキルを持っていらっしゃる方たちを学校に招いて、連携・協力しながら学習を進めるということをしております。

<竹山市長>

平野中学校の生徒の居住地は大阪府内で、平野地区外でもたくさんおられますよね。平野という地域の中で、地域の文化を学ぶことも大事だと思いますけども、自分の住んでいる地域との交流みたいな、ご指導をされていることはありますか。

<鈴木委員>

総合的な学習の中では、子どもたちが課題を見つけ、テーマを決めてフィールドワークに出て行くのですが、そのときに地域のさまざまな社会資源を使わせていただくということもしております。ただ、小学校では平野の地域学習が盛んですので、その際の人脈やネ

ットワークなどの地の利を活かしてフィールドワークを進めるということを提案する生徒も多数ございます。

<竹山市長>

ありがとうございます。

学力等の向上についてというテーマではございますけども、教育委員さんのご意見をお聞きいただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

<大島委員>

今回の資料の中で特に気になったのが、全国学力・学習状況調査の平成30年度の正答数分布のところで、全国を100としたときの小学校6年生と中学校3年生の状況が記載されているのですが、中学校3年生で正答数4割以下の子どもたちの割合が全国平均以上であり、状況としてよくないということです。これは、正答率云々の問題ではなくて、おそらく問題を読み取る力が身に付いておらず、まず問題を見たときに問題文を読み取れない、長い文章は苦手で手が止まってしまうという生徒がいるのではないかと思います。私も仕事の中でそういう生徒をよく見かけます。

逆に、70%までや100%までの正答率の生徒の割合は、大阪府と比べてもそれほど遜色なく同じくらいになっています。つまり、ある程度学力の高い子どもたちはいるけれど、低学力の子どもたちが多いために、堺市の平均が低くなってしまっているのだと思います。先ほど市長のお話の中でも、「誰一人取り残さない」とありましたが、私はそういった子どもたちほど支援していかなければならないと思います。学校に行っても授業が面白くない、先生の言っていることもわからない、そんな子どもたちはまず、時間を守って教室に入る、先生が来たら挨拶する、そうした基本的なことがきちんとできて、生活習慣が伴わないと、学力を向上させるのはなかなか難しいのではないかと思います。例えば、先ほど鈴木委員から、朝の10分の読書、放課後の10分の学習というお話がありましたが、その僅かな時間でいいので、自分もこの10分間ならできるというように、日々できることを積み重ねていくという習慣は非常に大事だと思います。

堺市には、「家での7つのやくそく」というものがあり、現在、教育委員会のフェイスブックなどで啓発していただいているのですが、それをもっと日常生活の中で意識できるようなシステムが広がればいいなと考えています。以上です。

<内藤委員>

私も小学校6年生の全国学力・学習状況調査の結果が上がっているのに、中学生になると横ばい、教科によっては下がっているのが気になります。また、平成29年度の結果では、堺市は家庭学習の時間が30分以下の生徒の割合が全国平均より多く、テレビゲームの時間が全国平均より長いというのも気になっています。

栃木県佐野市では、教育委員会が率先して、小学生では学年×10分間+30分、例えば6年生だと6×10分+30分、中学生はどの学年も2時間以上の家庭学習を推奨しているそうです。具体的に教育委員会が提唱するということが大事だと思います。堺市も、具体的な家庭学習の時間を提唱したらいいと思います。また、栃木県佐野市ではノーテレビデーを呼びかけているということで、堺市でもテレビゲームをしない日を月1回でも設定するなどの働きかけをした方がいいと思います。それが中学生においても家庭学習が定着する基礎になると思います。

<河盛委員>

私は会社を経営している立場で、新入社員や転入社員を迎えるにあたって、彼らの学力には関心が高いのですが、学力の中のいわゆる基礎学力であるところの読み書き、計算などは、学習習慣をつけて繰り返し取り組むことで向上していくものだと思っています。それから、基礎学力に関しては、ある単位でつまずいてしまうと「落ちこぼれ」になってしまうことがあります。社会人になっても割算ができないとか、分数がわからない方が実は結構いて、高卒あるいは大卒の方にもいらっしゃいます。ある単位で引っかかってしまったために前に進めず、授業が面白くない、ついていけなくなるというケースが多くあります。そうしたつまずきやすいポイントはある程度絞り込めると思いますし、教員の方は大体わかっていると思うので、その辺りの部分を放課後学習などでも重点的に取り組めば、より効率的に成果が出るのではないかと思います。

それから、社会人には応用する能力が求められていますが、社会人でも自分で考えることができない方がたくさんおられます。学校の授業で、教わったこと、言われたことをただ単に覚えるだけで、自分で考える習慣がなく、そのまま成人になってしまったのかなと思います。昔に比べると最近の授業では考えるという時間を多くとっていただいていると思いますが、それでもまだ不十分だと思うので、そういう考える機会を持たせるために、特定の教科やテーマに絞り込んで、とことん考える授業をやればいいんじゃないかと思います。

考える習慣をつけるということに関しては、子どもは自分の好きなことに関しては集中してとことん考えていきますので、子どもがのめり込むことができるようなものを見つけてあげるとか、自分の好きなことが何もないような子どもがいるとしたら、関心を持てるものはないか、周りが導いてあげるということも大事だと思っています。

<竹山市長>

ありがとうございました。

私も事務局から説明を受けたときに、小学校6年生では、正答数が70%まで、100%までの児童の割合が全国・大阪府よりも高いのに、なぜ中学校3年生になったら40%以下の生徒の割合が多くなるのかという理由を教育委員会事務局に尋ねました。推論として、中学

校進学時に私立に行く子が多いのではないかと言ったら、そうでもないそうです。私立中学校への進学率は他の市と同じくらいでありましたので、堺の中学生の学習のいろいろな問題点がここに隠されているのではないかと考えています。

今、内藤委員が家庭学習や生活習慣を具体的に見ていくことが大事だとおっしゃっていただきましたけども、教育委員会としてこのまま放っておいてはいけないのではないかと考えるので、ぜひこの対策を考えていただきたいなと思っております。正答数 40%以下というのは、読み解く力がないということで、読むことも嫌になっているのではとも思うので、なぜ学習に対して意欲がわかないかということを経験的に探究していただきたいなと思ってます。というのも、小学校6年生の算数Aが昨年政令市1位だったことを考えれば、3年後には中学校3年生で1位になっていなければなりません。1位になれないのであれば、その要因をしっかりと探究しないといけないと思います。教育委員会としての具体的な実践について、教育長お願いできますか。

<中谷教育長>

今、市長並びに教育委員の皆様からいろいろなことをお伺いしました。家庭学習、時間をきっちりとして繰り返し学習する習慣づけの重要性と併せて、どこでつまづいているのかをきちんと把握していくべきだろうと思います。そして学校でそのつまづきのポイントを直していくというのが非常に重要だと思います。

家庭との連携、これは非常に難しい部分があると思いますが、私は、小学生のときと、中学生になったときでの保護者の考え方、意識がどのように変わっていったのかを見てみるべきじゃないかなと思います。そこで何か問題があれば、学校がしっかり家庭、保護者との連携をとって、子どもたちに学習の習慣づけをしていくべきだろうと思います。

それとつまづき等をなくすには、教師力のアップが非常に重要なのではないかと思います。学校現場では、小学校、中学校ともに若い先生がたくさんいます。初任者でも4月に入ってきてすぐに教室で授業をするという状況です。行政職であれば、新入職員の隣には先輩職員がいて、常に上司もいる。その中で新入職員に対しては、上司からの指導、また先輩職員・同僚等からの指導が常にあり、日々成長していくというところがあると思います。一方、先生は学校に来ますと、朝の会議の後すぐに教室へ飛んでいき、1日教室で子どもたちと接していく。そして終わったら職員室に戻るといった動きになると思います。先ほども鈴木委員がおっしゃっていたように、公開授業であるとか、いろんな先生に見ただけの機会はあります。また、若手の先生に対しては、OB教員が見回り、指導・育成してくれていますが、どのような状況なのかを今後しっかりと分析し、指導体制づくりをしていかなければならないのではないかと私は思います。

<鈴木委員>

皆さんがおっしゃっているように、小学校から中学校に上がってデータが非常に良くな

い状況にあるというのはその通りだと思いますので、中学校に対するいろいろな艇入れが必要だろうと思います。

これは学校に限らずどのような状況でも同じだと思うのですが、問題を解決しようとしたときに必要なものは人と時間と情報です。そのベースにはお金がついて回るということです。でも何から始めるのか、すべて同時並行で進めるのかというのは、その状況ごとに、問題の深さであるとか広さで変わってくると思うのですが、人をつけることで変わってくることはたくさんあります。それによって余裕の時間が生まれることで、先生たちが子どもたち一人ひとりに目が行き届くようになるということもあります。

それから、例えば附属学校では、昨年度までは全て40人学級でした。ところが、小学校がずっと35人学級で推移していましたので、その子どもたちが今年入学するということに、文科省と交渉して、平成30年度からは36人学級で、1割減にしました。財政的にはもちろん厳しくなりますが、1割減のだけで、クラスの把握であるとか、教員の負担というものは随分変わってまいります。それから技術家庭に関しては、クラスを半分に割って、半分が技術分野、半分が家庭分野を学習するという形をとっています。実験や実習において、しっかり一人ひとりが技能を習得でき、設備も十分に活用しながら、先生の目が行き届くということで安全管理もしっかりできるような学習を実践しています。それによって一人ひとりの学習の密度が倍になりますので、かなり効果はあると思います。

<竹山市長>

今、堺市の小学校では少人数教育を行っていますが、中学校はまだなので、そこが課題です。中学校の状況を見たら、人をつけないといけないということがわかります。事務局から何かありますか。教育監いかがですか。

<教育監>

堺では財政面でもいろいろとご支援をいただき、さまざまな施策が打たれていると思います。生徒指導主事の加配、小中一貫教育における加配などは、他市ではなかなか見られない素晴らしい施策であって、うらやましいという声さえも聞くところがございます。ただ結果として、いろいろとご指摘いただいているように、小学校から中学校へ上がったときに成果が表れていないという状況ですので、現在新たな取組を考えております。小学校の学び方を中学校1年生にどう引き継ぐのか、小学校、中学校で一貫した授業をどのように作っていくのかというところが求められており、成果を上げていくことが課題だと思っております。

また、低学力層に対しては、現在学び直しに取り組む中学校が増えています。こうした取組によって、今後、中学校でも全国・大阪府の平均を上回るような結果につながっていくのではないかと信じております。

<竹山市長>

ありがとうございます。

確かに静謐な授業環境をいかにして作っていくかということに堺市は精力を注いできており、それがかなり小中学校では浸透しつつあります。徐々に学力がこれに伴って上がっていくのではないかと思います。

そしてまた、全中学校に専任の生徒指導主事1名を加配していますので、この効果は徐々に着実に出てくると思いますが、なかなかすぐに出てくるものではないので、この辺りは長い目で見ないといけません。ただ、その次に打つ手はどうしたらよいかということを考えていかなければなりません。その具体的な方策について、内藤委員がおっしゃったような他府県市の例を十分に参酌しながら考えていかなければならないと思います。

<大島委員>

小学校から中学校に上がる時の話ですが、小学生のときは、子どもたちは毎日帰ったら必ず家庭学習をしています。保護者の方が家庭学習に関わり、読み聞かせの相手をするとか、宿題をやったことに判子を押しということが日常的に行われているからです。ところが中学校に行くと、保護者の方は「もう中学生だから、見なくても大丈夫」とおっしゃいます。しかし、ついこの間まで小学生だった子が、中学生になったからといって、急に自己管理ができるかと言えばできません。やはり子どもは保護者の方がチェックしないと、宿題は後回しにします。また、中学校になるとスマホを持つ子どもが多いので、家に帰ると、家庭学習ではなくて、まずスマホになります。保護者がいないと誰のチェックもないので、その時間が1時間、2時間、3時間と増えていく、それが現状です。

私は、中学生になればその分家庭学習の時間を増やさなければ学力向上は望めないと思います。なので、保護者の方を巻き込むこと、家庭での関わりということをどのようにやっていくかというのを最優先で考えていかないといけません。中学生になると我が子がどんな教科書を使って、どういう課題をやっているのか、保護者の方はほとんどご存じないです。それが学力に比例しています。なかなか難しいことではあるとは思いますが、せっかく小学校のときについた習慣を、毎日家に帰ったらたとえ30分でも勉強するという習慣を、何とかして中学校でも継続できないかなと思います。それだけでも随分変わると思っています。鈴木委員は、小学校、中学校を見ておられて、小学校のときの家庭学習が中学校ではどのように変わったかなど、もしよければ教えていただければと思います。

<鈴木委員>

具体的な追跡調査をしているわけではないですが、先生方の教え方が異なることで、子どもたちが迷ってしまうことはよくないということで、中学校の先生方が小学校の授業参観に行ったり、研究発表会を見に行ったりしており、小学校の教え方はある程度わかっています。ただ、日々何をしているのか、毎日こういうノートを書きます、自由ノートを出

しますなど、具体的に何をしているのかということも、少なくとも中学校の先生方には知っておいてほしいということで小学校から情報提供していただいたり、小学校の管理職の方に中学校の先生に向けて小学校の文化を話していただいたりしています。

また、3年前から、明日の予定等を書くような備忘録というものを中学生に持たせるようにしました。少なくとも1年生の間は全員必ず持つということで、教科の先生方も宿題を出したときには、必ずその備忘録に今日の宿題はこれだよ、ということその場で書かせます。家庭でも備忘録に何が書かれていて、どんな宿題がどの程度出ているのかということに保護者の方も関心を持ってくださいというアナウンスは、特に1年生の1学期はかなり丁寧にやりました。その習慣がつくと2年生、3年生でも明日の予定がきっちり書けて、宿題がどうなっているのかということも把握できます。保護者の方が備忘録をチェックしたときに、指導しやすいような情報を提供しております。

<竹山市長>

今の備忘録のことは、河盛委員のおっしゃっている考える習慣にもつながるのでしょうね。書くということは、ただ単に書くのではなくて、考えるということになるので、いろいろと頭の中が回転していくことになると思います。

それと我々が再認識しないといけないのは、中学生になったら、「もう中学生だから」という言葉を使うことなく、早寝早起き、朝ご飯といった「家での7つやくそく」の習慣づけを、もう一度中学生からやらなければいけないということを、中学校入学時に、保護者の皆さん方にしっかりと啓発しないといけないと思います。

まさに中1ギャップの克服が大事ですが、生活習慣は、学力や生活態度などの問題にも及んでいくことになるので大事だと思います。こういうテーマを区教育・健全育成会議でも、しっかりと取り組んでいきたいなと思います。

<内藤委員>

昨年、中学校でタブレットを使った授業を視察させていただきましたが、あの授業は良かったなと思います。復習もできますし、先生の手数も省けますし、子ども一人ひとりを見ただけです。今年度、全中学校に整備されるのですよね。

<竹山市長>

来年1月から始まります。

<内藤委員>

期待していますのでよろしくお願いします。

<河盛委員>

保護者の方も、中学生になったらもう見なくても大丈夫という意識もあると思いますが、同時に小学校の教科書は保護者の方も理解できるけれど、中学校になるとレベルが上がり、理解が難しくなるということもあります。

それから、中学生になるとクラブ活動も盛んになりますし、授業時間も内容も増えてくるので、小学校と同じようなペースで宿題や勉強をすればおそらく寝る時間がなくなります。そういう意味で勉強の効率を上げないといけません。どのように集中して効率的に学ぶのかということも学校で教えてあげてほしいと思います。

<中谷教育長>

まさに今、河盛委員がおっしゃった集中することと、内藤委員のおっしゃったタブレットの活用というのは、生徒たちが集中して授業に取り組むという点で関連があるという気がします。平成27年度から小学校でタブレット等を活用した授業を導入し、現在中学校については3校にパイロット的に取り入れて、約1年半経過しています。これらについては12月の教育フォーラムで、それぞれの学校から実践発表を行います。来年1月には、タブレット整備の効果、授業の集中度について、効果検証していく必要があると思います。

タブレットを全中学校に導入することで全中学生が授業に集中できるよう、教員も工夫しなければいけないと思いますし、同時に期待したいと思います。

<竹山市長>

ご紹介いただきました大阪教育大学附属平野中学校の実践を踏まえて、我々はしっかり考えていかなければならないと思っております。多様な連携のあり方ということ、まさに私たちはそれぞれの地域の公立小学校、中学校があるわけですから、多様な地域との連携をどう図っていくかということ、地域の皆さんに子どもを指導してもらおうというような、保護者のみならず、地域を巻き込んだ教育をしっかりとやっていく必要があると思います。そういう意味で、この総合教育会議も7つの区教育・健全育成会議が連携することが大事だと思いますので、ぜひまた区教育・健全育成会議の委員さんも含めて教育委員さんとのお話もしていきたいなと思います。

ほかに何かご意見はございますでしょうか。よろしいですか。

本日の総合教育会議は貴重なご意見をご提供いただきました。本日のご意見等を踏まえて、教育長、教育委員の皆さんと課題や今後の方向性の共有が一定図れたと思いますので、堺市の教育行政の推進を今後一層進めたいと思います。

それでは以上をもちまして今年度の堺市総合教育会議を終了します。

誠にありがとうございました。

閉会 正午